

「月が奇麗ですね」と言え

「ちよつと好きって言ってみて」

「え？」

先輩の言葉に耳を疑がった。読んでいた本から目を上げて言う。

「今部活中ですよ」

「部活終わった後ならいいの？」

先輩が首を傾げる。話が噛み合わないので無視をした。開けた本の文字を先輩の小さい手が覆う。

「無視するな」

「今度は何の影響ですか」

「今読んでるまんが。もう甘っ甘なの。もう甘っ甘。私もそんな青春がしたい」

「どうぞして下さい」

先輩は「はあくあ」と叫び椅子の上でのけ反った。明らかでない非難のため息に呆れて本を閉じる。女の子とは思えない態度と、美しく頸筋。ぼくは「先輩」と呼んだ。

「何」

「好きです」

先輩が胡散臭そうに眉を顰めて身を起す。

「君に言いたい事がある」

「なんです」

「物事にはタイミングというものがある。夫を勉強しなさい」

「でも好きです」

ぼくは先輩を見詰めた。

「本当に」

言う先輩は「え、あ」と真っ赤になって狼狽えた。

「そういう芝居？」

「本音です」

「ちよつと、待って」

視線を合せられなくなった先輩の右手を取る。両の手で包み込む。敢て何も言わずにいた。人さし指を撫でると、かすかに震えている。

「本気？」

「本気です」

立ち上り、抱き締めて先輩の額を胸に押し当てた。

「ははははははは」

一緒に帰ると、先輩は興奮した状態で左手に持った鞆を大きく速く回した。

「危ないですよ」

「そうだったとはね、君がそうだったとは」

今日十回以上言った言葉を又独語く。独語くと言ったが随分大きい声だ。「近所迷惑ですよ」季節柄まだ明るいとは言え、十八時を過ぎていたので注意する。

「ははははははは」

笑うが、真面にぼくのことを見ようとしなない。耳も真っ赤だ。距離が、いつもより離れている。

先輩が発作のように突然声を上げる以外は、会話らしいものもなく二人で歩いた。夏の空は、青く、美しい。白い雲も、情緒を添える。「先輩、ほら」雲の厚みが立体的で、指し示そうと肘に触れると、先輩の肘は遠くに逃げた。

「どどどどうしたの」

「いや、空が奇麗だったので教えようと思った丈です。いつも先輩の方が躁然ぎ回るじゃないですか」

「ききき奇麗」

先輩が固まるので言い足す。

「いや、空の話ですよ。先輩は奇麗と言うより可愛いです」

「か」

先輩が完全に固まったので手を握って引いて歩く。掌<sup>てのひら</sup>らが汗で濡れていたが、不快感はなかった。

家で勉強していると、先輩からメールが届いた。随分<sup>ずいぶん</sup>長い。文面からも躁然<sup>はしや</sup>いだ様子が伝わってくる。返す為にメールを作っていると、電話が鳴った。

「はい」

「今何してるの」

機嫌の悪そうな声だった。十日前に別れた元恋人だった。

「メールを作ってた。夫<sup>それ</sup>と勉強」

「ふうん、私への謝罪のメール？」

「違う。恋人へのメール」

「は？ もう彼女できたの？ 考えらんない何も反省してないのね。あんたは彼女作るの向いてないのよ、これ以上の犠牲者が出ないよう今すぐ別れなさい。あんた『好き』って気もちほんとに分<sup>わか</sup>つてんの？」

「自分なりには」

「あたしと付き合った当初と今の彼女への気もち、どっちが強い  
の」

「わからない」

「ほら見なさい。『好き』っていうのはね、勘違いでも何でも『この世界にこの人しかない』っていう特別な、純粹な気もちなのよ。あんたに夫<sup>それ</sup>があるの？ ないでしょ。あーあまた罪のない女の子が心の傷つくるのね。かわいそう」

一頻<sup>ひとしき</sup>りぼくを責めると元恋人はブチリと電話を切った。何が言いたかったのだろうと思う。同時に途切れた携帯電話を見つめて、先輩への気もちの揺<sup>ゆら</sup>ぎを感じる。

下駄箱<sup>げたばこ</sup>で靴<sup>くつ</sup>も履<sup>は</sup>き替<sup>か</sup>えずに手紙を見ていると、後ろから追突され

た。

「どーん」

「痛い。おはようございます」

「おはよう、おはよう」

打衝かかってきたのは先輩だった。随分顔が緩んでいる。もう一度「痛い」と主張してみる。

「何」

「いや、背中が痛いなと思って」

「何、謝罪を要求している訳？ 夫ともさすって欲しいの。さす」  
自分で言っただけで想像したのか先輩は赤くなつて止つた。謝罪は諦らめて持っていた手紙を脇に挟み、靴を履き替える。「それ、何」と先輩が脇の手紙を指した。

「ラブレターです」

「ラブ？ 誰の？」

「見たことない名前ですね。一年の子かな。放課後校門の前で待ってると思いますね」

先輩の顔が驚ろいたまま止つた。「どうするの」固い表情のまま言う。

「断わりますよ。会って断わるか、放っておくか、其所が問題です」

「……会って言って上げなさい」

先輩が静かに言った。会った当初の勢いを思い浮べて、夫々の美くしさを並べる。先輩の背中をさすった。先輩は「だわあ」と叫んで走って逃げた。

「先輩」

校門へ行くと、可愛い女の子が立っていた。背が小さい。ここじゃあなんだからと言って近くの公園へ誘った。女の子は俯向き、始終もじもじしている。

「それで、話して？」

いつまで待っても話さないの、ぼくから促うなががした。「あの、私」  
 言いながら俯うつむ向きは更に益ます。指を組くみ換え組くみ換えしている。何を逡巡たぬちっているのだろう。好きと言う丈だけじゃないか。ぼくはごめん  
 或あるいはいいよと言う。十秒で終おわるやり取りに何故なぜこれだけの間まが必  
 要なのだろう。手紙を貰もらった時点で大体の用事は分わかっている。ぼく  
 からごめんと言いっていいものなら言うけれど。考えながら待まちつてい  
 ると女の子はやがて口を披ひらいた。

「あの、私」

「うん」

「先輩のこと、先輩のことが」

「うん」

「………」

「うん、ぼくの事が？」

「遠くから見みていて、あ遠くからって言いってもストーリーカーじゃな  
 いですよえへへ。逮捕されちゃうー先輩通報つうほうしませんよね優しい  
 からえへへ。あ、何で優しいか知しってるかって言いうと彼女さんとで  
 すね、話わしているのを遠くから見みまして、あ遠くからって言いっても  
 今度は会話きごが聞きえるぐらいの距離きょりだったからそんなに遠くないかも  
 しれないですね、その話わしてる時の声こゑとか顔かほとか態度たいどが大変優やさしい  
 んだなあ、思おもいましてですね」

「うん」

「私、私も、こんなかっこいい人にこんな優やさしくされたいなああと、  
 思おもいましてですね、かわいい彼女さんがいるの分わかってるんで私わたしみた  
 いなチビで鈍どんくさい女おんなの出でる幕まくじゃあないと、夫それは分わかってるんです  
 けど、あの、できれば気きもち丈だけは伝えたい、あ違ちがった噂うわさですね、  
 結構早く彼女さんと別わかれちゃうこと多いって、聞きいてですね、あ違  
 う違ちがう違ちがいます私わたしにもチャンス下さい！ 一週間でいいです」

緊張で張はり裂さけそうな様よう子が伝つたわり、面白おもしろく思おもった。女の子は膝  
 の上に置おいた拳こぶしを見みつめ、肩かたを震ふるわせて返かえ事を待まちった。その肩かたに  
 手を置おいて優やさしく諭さとしたかったが夫それは控こえた。

「ごめんね」

できる限り穏やかに話しかけた。

「今恋人がいるから。ごめんね」

「いえ、ありがとうございます」

女の子は立って最後に笑顔で言った。美しくいと思ったが、夫は言わずにいた。「結構早く彼女と別れる」という噂にも、弁明したく思ったが、夫はやめて女の子と別れた。

「好きだよ」

言うと思う。好きだと言うことに、何の恥らいや抵抗があるだろう。好きなものだから、気もちの儘伝える丈だ。なのに先輩は恥しがる。夫を面白いと思う。「好きがわかるの」と言った元恋人の言葉を思い出す。自分なりには分っている。胸の中に答えがある。夫をそのまま言葉にすることはできない。だから代りに「好き」と言う。夫だけのことじゃないかと思う。

先輩のことを、特別と思っている。ただ「特別」と「好き」が同じと思わない。確かに、元恋人のことも特別と思っていた。いつか特別じゃなくなった。夫は、いつから左うなったものかわからない。先輩もいつか特別じゃなくなるかもしれない。夫でも、今は、特別だ。ただ「特別だよ」では伝わらないので、好きだよと言う。

「ちよっと、待って」

先輩がぼくを押し留めた。ぼくの室にいて、押し倒した所だった。電気はもう消している。唇を合せると、もう一度ちよっと待ってという。

「心の準備が」

言うので、抱き締めて髪を撫でた。艶のある黒い髪。先輩は少し震えて言った。

「私、スタイルにも自信ないし」

「大丈夫。女の子はみんな奇麗だから」と言おうとしたが、誤解を招きそうなので控えた。引き続き髪を撫でていると、「経験、あ

るの」と先輩が訊いた。

「少しだけね」

「じゃあ無理。今日は絶対無理。無理」  
頑くなに言うので笑って仕舞った。

「じゃあ、もし経験なかったら？」

「それはそれで無理！」

叫んで獅噛み付くので尚笑った。今日は諦らめるか。狭い額に口付けて抱き竦める。

「ごめんね。初めてだから、怖くて」

「ううん、ごめんね。強引だった」

肌を合せる喜びを知らなければ、迫らなかつただろうかと思った。万一こどもが出来ても、ぼくにはどうにもできない。でも抱きたいと思った。思っただけで迫るなら、獣と一緒にだと思った。

気付けば、夜になっていた。一度起き上ってカーテンを開けた。又ベッドに寝転ぶ。明りも点けずにいると、月がよく見える。今日は満月だった。「きれい」先輩が独語く。

「たしかに、きれいだ」

先輩と二人で見る月は、輝いていた。

「ねえ、『月が奇麗ですね』って知ってる」

「なんですかそれ」

言う先輩は笑った。

「『月が奇麗ですね』って言ってみて」

「なんでですか」

「言え」

「月が奇麗ですね」

「違ーう心の込め方が違う！ 月が奇麗ですねと言え」

「なんなんですかそれ。心込めてますよ」

「アイ・ラブ・ユーよ」

「え？」

「アイ・ラブ・ユーを訳すと月が奇麗ですねになるのよ」

「なりませんよ」

「なるのよ。月が奇麗ですねと言え」

「愛してる」

「え？」

「君を愛してる」

言うと先輩は赧れた様子で「もう、やだ」と言った。

「ありがとう。でも違うのよ。それだけじゃないの。『愛してる』も『好き』も『君が必要だ』も『そのままの君でいい』も『結婚しよう』も『君を守る』も『幸せにする』も『幸せになろう』も許す気もちもそばに居たい気もちも怒る気もちも泣きたい気もちも何も言わずに、手を握ることも抱きしめることも髪を撫でることも『ありがとう』も『ごめんね』も『月が奇麗です』も『死んでもいいわ』も『アイ・ラブ・ユー』も、胸の中の気もちの、一つの形なのよ。誰かへ真つすぐに向った気もちの、一つの形なのよ」

「じゃあ、先輩の気もちの今の形は」

「……大好きだあ！」

言って先輩は強く抱き付いて来た。先輩の、胸の鼓動が伝わる気がしたが、夫は自分の胸が速く脈搏っていたからかもしれない。ぼくは、先輩を抱き返して、月を見上げ、もう一度強く抱き返した。

「誰よりも君が特別だ。今、誰よりも君のことが特別だ」

月明りだけでなく、街灯の明りが部屋を照らした。目を閉じてても、

先輩のしあわせそうな顔は消えなかった。